

第1問 次の文章を読んで、後の問い（問1～問6）に答えなさい。

『風土』についてすぐに思い出す二つのエピソードがある。アメリカ移民の里帰り組が汽車のなかでさかんにアメリカを讃え、日本をけなしていた——「なにしろ、日本の家屋は貧弱だから」。それを聞きとがめたわたしの友人は、日本の風土の違いを指摘して、アメリカの高層建築と日本の家屋とのあいだに優劣はないとつよく反駁した。かれは『風土』を読んだばかりであった。もう一つは敗戦直後の講演会——有名な「進歩的」学者は、日本農業の将来の方向はソ連のようなコルホーズ化であると主張した。聴衆の一人が彼我の風土の違いを指摘すると、講演者はそれは自然決定論だといつて、とくに『風土』の書名をあげ、その内容をはげしく非難した。この二つのエピソードは、『風土』の受けとり方のいわば両極を示している。

本書は、(注1)和辻哲郎の欧州留学から生まれた。

「自分が風土性の問題を考えはじめたのは、一九二七年の初夏、柏林に於て(注2)ハイデッガーの『有と時間』を読んだ時である。人の存在の構造を時間性として把握する試みは、自分にとって非常に興味深いものであった。然し時間性がかく主体的存在構造として活かされたときに、何故同時に空間性が、同じく(7)フーコー的な存在構造として、活かされて来ないのか、それが自分には問題であった。……このような問題が自分に現われて来たのは、……丁度さまさまの風土の印象に心を充たされていたためであったかも知れぬ」

かれは序言にこう記しながら、しかし本書は人間存在の構造契機としての風土性を明らかにすることを目的とするものであって、自然環境がいかに人間生活を規定するかは問題にしない、とも断わっている。

われわれは風土においてわれわれ自身を見、その自己了解においてわれわれ自身の自由な形成にむかう。だから、具体的な風土は単なる自然科学的対象ではなくて、人間存在または歴史と離れがたくからみあっている。歴史性と風土性の合一において、いわば歴史は肉体を獲得する。人間は単に一般的「過去」を背負うのではなく、特殊な「風土的過去」を背負う。歴史は風土的歴史であり、風土は歴史的風土である。風土の型は、やがて人間の自己了解の型とならざるをえない。A こうしてかれは、風土の型から人間存在の型へ迫ろうとするのである。

そこで、三つの風土の類型があげられる——モンスーン、沙漠、および牧場。

モンスーン域は東アジアの沿岸一帯をふくみ、暑熱と湿気との結合をその風土的特性とする。湿気は最もたえがたく、また最も防ぎがたいものであ

る。人間の内に「自然への対抗」を呼びさまさない。その理由の第一は、陸に住む人間にとって、湿潤が自然の恵みを意味するからである。理由の第二は、湿潤が自然の暴威をも意味することである。暑熱と結合した湿潤は、しばしば大雨、暴風、洪水、旱魃かんぱつとなつてあらあらしく人間に襲いかかる。それは、人間をして対抗を断念させるほどに巨大な力であり、人間をただ忍従的たらしめる。こうして、一般にモンスーン域の人間の構造は、

Bとして把握することができる。

つぎに沙漠（アラビア、アフリカ、蒙古など）は、乾燥をその風土的特性とする。外なる自然は死の脅威をもってひとに迫るのみであり、ただ待つだけのものに水の恵みを与えない。ひとは自然の脅威とたたかいつつ、同時に他の人間の脅威ともたたかいつつ、沙漠の宝玉なる草地や泉をもとめて歩かねばならぬ。ひとと世界との統一的な関係は、ここでは、あくまでも対抗的・戦闘的關係として存する。そのたたかひにおいて、ひとはまた団結せざるをえない。したがって、沙漠の人間はその共同態への服従をよく要求される。一般に、沙漠域の人間の構造を **C**として、あるいはまた実際的・意欲的として把握することができる。

最後に牧場は、ヨーロッパを指す。ここは湿潤でもなければ乾燥でもない。いや、湿潤と乾燥の総合そうごとして規定される。夏は乾燥期、冬は雨期である。夏の乾燥は雑草を生育せしめない。草は主として冬草であり牧草である。ヨーロッパの夏の野をおおうものは、柔かい冬草である。ただし地中海地方では、冬草すら夏の野に見ることができぬ。このように、夏の乾燥と冬の湿潤は雑草をイクチクして、ヨーロッパ全土を牧場たらしめる。そして、このことは、農業労働の性格を規定せずにはいない。日本の農業労働のウカクシンをなすものは草取りである。これをおこたれば、耕地はたちまち荒廢する。しかしヨーロッパでは、この雑草とのたたかひが不必要なのである。農業労働には防禦ぎよの契機はなく、ただ攻勢的な耕作、播種はくしゆ、収穫のみがあるとよい。自然は人間にたいして従順である。このことをいっそう露骨に示すものは、地上の草よりもむしろ氣象である。暑熱と結合した湿気は大雨、洪水、暴風というような「自然の暴威」としておのれを現わすが、湿気が暑熱とはなれたところでは、このような現象はきわめて稀まれである。自然は合理的な姿においておのれを現わしてくる。ひとは自然のなかから容易に規則を見いだすことができる。そうして、この規則にしたがつて自然にのぞむと、自然はますます従順になる。このことが、人間をして、さらに自然のなかに規則を探索せしめるのである。もちろん、西欧の陰鬱は南欧の晴朗と異なる。しかし、合理性をたつとび人工をよるこぶところの古代人の遺産をとおして、西欧人はその陰鬱の底にある牧場的性格を自覚した。そうして、この自覚よつてのみ、とくに西欧的なる文化の創造がなしとげられたのである。

以上は、三つの風土にたいする和辻の考察の概略であるが、しかし、本書の真の面白さは、このような概略では、とうていわからない。それは、明確に規定された風土の類型から、それぞれの地域の宗教、哲学、科学、芸術一般の特性を分析していく手腕の冴えにある。和辻の詩人的直観と強靱な分析力とは、ここにみごとなユウゴウを示している。

だが、詩人的直観は、往々にしてかれの強靱な分析力を誤った方向に導くことがないとはいえぬ。たとえば、ヨーロッパ的風土の特性をつかむ端緒となった「ヨーロッパには雑草がない」という観察なども、それは、日本からの往路、「初めてイタリア南端の陸地を瞥見し得るに至った朝」、同船の農学者大槻正男博士から指摘され、その後、さらにかれ自身の南欧の旅によって確認されていたものである。そして、夏は乾燥期で冬は雨期という南欧の気候的特性が、「南と北との著しい相違にも拘らず、ヨーロッパを通じての特性」として敷衍された。なるほど、地中海地方は、かれのいうように、顕著な冬雨型気候で「雑草がない」。すくなくとも雑草がきわめて少ない。だが、西欧の気候はそれとはまったく異なり、降雨の季節的分布は日本と同一で、ただ、年降雨量が日本の約半分なのである。だから、もちろん、雑草は生える。中世以来、長くおこなわれた三年に一度の休閑も、まさに除草の必要によるものなのである。一方、地中海農業の二年に一度の休閑は、まさに保水のためにおこなわれるのである。

だが、さらに重要な問題は、和辻の風土論がほとんど静態的な考察に終始して、新しい発展ないし変化の可能性の方向をすこしも示していない点である。これでは、自然決定論、宿命論といわれても、いたしかたないであろう。冒頭にかかげた二つのエピソードは、『風土』の長所と短所とを端的に示している。かれもいうように、今まで、歴史の側からの考察に比して風土の側からの考察はいちじるしく（カ）キャンクされてきた。それは、この問題が学的把握にとつてきわめて困難だからでもあった。この困難な問題にあえてとりくんで、しかも相当の成果をあげたことは、和辻哲郎の大きな功績である。この長所をますます積極的にかしつ、自然決定論をいかにして克服するか、そこに今後の風土論の発展方向がある。

（桑原 武夫編『日本の名著』中央公論社、飯沼二郎著「和辻哲郎『風土』」による。ただし一部本文を改変した。）

（注）

- 1 和辻哲郎……（1889～1960）日本の哲学者・倫理学者・文化史家・日本思想史家。著作は『古寺巡礼』、『風土』などが有名。
- 2 ハイデッガー……（1889～1976）ドイツの哲学者。

問1 傍線部(ア)～(オ)の漢字に相当する漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は

1

5

(ア)

コン
ゲン

- ① 事態はコンメイの一途をたどる
- ② コン札の準備をする
- ③ ダイコンで煮物を作る
- ④ 仕事がなくてコンキユウする
- ⑤ コンガンに負けて助ける

(イ)

ク
チク

- ① チクリンの七賢
- ② 論理のコウチク
- ③ カチクの世話
- ④ 経験のチクセキ
- ⑤ チクイチ報告する

(ウ)

カ
ク
シン

- ① カクダイ解釈する
- ② カクリツの問題を解く
- ③ チュウカクとなる考え
- ④ カクウエの生活
- ⑤ カクジが意見を出す

(オ)

5 カンキヤク

- ① 買い物をしてカンカを過ごす
- ② 言葉にカンシンを持つ
- ③ カンショウ的な気分になる
- ④ カンコの声に応える
- ⑤ 大入りのカンキヤクに沸く

(エ)

4 ユウゴウ

- ① ユウシユウな人材を確保する
- ② 銀行からのユウシを期待する
- ③ ユウシユウの美を飾る
- ④ ユウゼン染めの着物
- ⑤ 彼の将来をユウリヨする

問2 傍線部A「こうしてかれは、風土の型から人間存在の型へ迫ろうとするのである」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の

うちから一つ選びなさい。解答番号は 6。

- ① 人間存在の構造契機としての風土性を明らかにすべきだと考えていた和辻哲郎は、ハイデッガーの『有と時間』の中に、この問題を解く手がかりがあると気づき探求を始めた。
- ② 和辻哲郎は『風土』の序言で、自然環境が人間生活を規定するかは問題にしないと述べながらも、歴史性と風土性の合一の中では、自然環境によって人間存在の型は決まってくると考えていた。
- ③ ハイデッガーの『有と時間』を読んだ和辻哲郎は、それに刺激を受けて、そこに書かれた時間性にあらたに風土性を加味した観点から人間存在の型を探ろうとした。
- ④ ハイデッガーの『有と時間』を読んだ和辻哲郎は、それに刺激を受けながら、そこでは活かされていない空間性に着目し、歴史性と風土性の合一という観点から人間存在の型を探ろうとした。
- ⑤ 和辻哲郎は、風土は単なる自然科学的対象ではなく、歴史と離れがたくからみあっているからこそ、人の存在の構造を時間性として把握するハイデッガーの試みと合致すると考えた。

問3

B

に入る語として最も適当な組み合わせを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は

7

。

① 服従的・受容的

② 受容的・忍従的

③ 戦闘的・合理的

④ 服従的・戦闘的

⑤ 合理的・忍従的

問4

C

に入る語として最も適当な組み合わせを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は

8

。

① 服従的・受容的

② 受容的・忍従的

③ 戦闘的・合理的

④ 服従的・戦闘的

⑤ 合理的・忍従的

問5 傍線部D「『風土』の長所と短所とを端的に示している」とあるが、「長所と短所」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、

次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 9。

- ① 人間存在の構造契機を風土の型という視点から考察する試みは、これまでになかったことであり、その視点の新しさこそ『風土』の長所といえる。一方で、風土の型によって異なるという考察に終始して、そこから発展ないし変化の可能性が指摘できていない点が短所といえる。
- ② 西欧人はその陰鬱の底にある牧場的性格を自覚し、西欧的なる文化の創造がなしとげられたという分析のあり方は、『風土』の長所といえる。一方で、その分析が彼の南欧の旅という体験のみからなされたものである点が短所といえる。
- ③ 人間存在の構造契機を風土の型という視点から考察する試みは、これまでになかったことであり、その視点の新しさこそ『風土』の長所といえる。一方で、読み手の立場によっては、書かれた内容が自然決定論、宿命論としか読めないという点が短所といえる。
- ④ 三つの風土の類型から、それぞれの地域の特性を分析する強靱な分析力が『風土』の長所といえる。一方で、往々にして彼の強靱な分析力を誤った方向に導くことになる和辻の詩的直観は短所といえる。
- ⑤ 三つの風土の類型から、それぞれの地域の特性を分析する手腕の冴えが『風土』の長所といえる。一方で、その結論が自然決定論、宿命論と
言われても仕方のないようなものである点が短所といえる。

問6 本文の内容に合致しないものを、次の①～⑥のうちから二つ選びなさい。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は

| |
|----|
| 10 |
|----|

 ・

| |
|----|
| 11 |
|----|

。

- ① 和辻哲郎の『風土』は、単なる自然科学的対象ではない、人間の存在または歴史と離れがたくらみ合った風土が考察の対象となっている。
- ② 『風土』にある三つの風土の類型は、それぞれの地域における自然のあり方と人間の構造がどのように関係しているかを分析している。
- ③ 『風土』の面白さは、三つの風土の類型を的確に挙げたところであり、それは概略でも十分に理解できる。
- ④ 『風土』の読者は、その立場によって両極ともいえる受けとり方をする傾向があるが、それは『風土』の長所と短所に由来する。
- ⑤ 『風土』では、和辻の詩人的直観と強靱な分析力がみごとに融合して、人間の存在の構造を余すところなく捉えることができている。
- ⑥ 『風土』の長所と短所を理解した上で、自然決定論をいかに克服するか、和辻以降の風土論の発展方向がある。

第2問 次の文章を読んで、後の問い(問1～問6)に答えなさい。

引きさかれてなお高まる恋というものがあろう。在原業平の場合がそうであった。業平は阿保親王の子であり、阿保親王は平城天皇の皇子であるから、要するに皇族である。皇族は帝位にある方から数えて五代目まで王号を称えることが出来たから、業平は本来は在原姓などを持たず、業平王と呼ばれるはずの身であった。

だが「薬子の乱」が業平の運命を変えた。「薬子の乱」が平城上皇側の敗北に終わった時、上皇は剃髪し、東宮位にあつた平城皇子の高岳親王は、東宮を廢されて在原姓を賜わり臣籍に降った。それを目の前にした阿保親王は、自分の子供たちをも臣籍に降されるようにと願ひ出て、業平は兄の行平たちと共に在原氏となったのである。政変などという危険なものから自分の子供たちを遠ざけよう、という親心であろうか。それなら小一条院の場合とは比較にならぬ小さな安全策だと言ふべきだろうが、阿保親王は「承和の変」の時にも小さな動きをしたとされる。例の嵯峨皇后のもとに投ぜられた密告書は、阿保親王からのものだといふのである。阿保親王をかつぎ出そうとする一部の動きが実際にあつたのであろうが、藤原良房のやり口を懼れて安全策に走つたといふことなのであろう。だが密告は後暗いものである。親王は良房に利用された形のまま、その後暗さの中で同年中に亡くなつてしまう。

すでに十八歳になつていた業平にとつて、藤原氏のやり口は許し難いものであつたろう。だから業平が藤原の娘を愛するなどということは、あり得ぬことのはずであつた。にもかかわらず業平が藤原の高子を愛してしまつた、ということは、高子への恋がありきたりなものではなかつたということの意味しよう。だからまた、引きさかれた時の業平の思ひは、なお激しい情熱となつて高まつたに違ひなかつた。

業平の恋がどのように高く激しいものであろうと、それは歴史に書きとどめられるものではない。私情にすぎないからである。だが幸いにも業平は^ア卓越した歌人であり、その恋は彼の歌と共に世にひろまつて、文学作品に結晶し、歌物語と呼ばれるジャンルの祖となつた。『伊勢物語』である。

『大鏡』も二人のことに触れずにすまずわけには行かなかつたと見えて、「陽成紀」の所で生母の高子と『伊勢物語』の幾つかの段とに触れている。ここでは高子との事ではなさそうな話すら、高子とのことときめて語られていて、『伊勢物語』の女性と言へばまず二条后高子、と思ひ込む風潮があつたことを示している。それほどに二人の恋は評判だつたといふことだが、文学が至高の情とみなす恋も、政治家には物の数ではなかつた。「月やあ

らぬ」の業平の絶唱も、良房や基経（良房の養子）の耳には、虫のかごとの如きものであったかも知れない。

藤原氏の実力の前で政権から遠ざかって行った貴族たちが、文化人として非凡な活躍をする才能の持ち主であったことは、日本文化の幸運であった。特に源融は、一世源氏という血筋と言い、左大臣という身分と言い、棲霞観（今の嵯峨清涼寺のあたり）や河原院（今の枳殻邸のあたり）を造営し宇治にも別邸を持った（今の平等院のあたり）と伝えられる財力と言い、河原院に陸奥の塩釜の風光を模した庭園を作り海水を運ばせて塩焼きの業を楽しんだと伝える風流心と言い、当代きつての風流人であって、風流貴族たちのパトロンたるべき資格を備えた人物であった。先に挙げた『伊勢物語』も、恐らく在原業平・行平ら在原氏の人びと、業平の妻の父で、甥にあたる惟喬親王即位の夢破れた紀有常ら紀氏の人びと、源融の血縁たる嵯峨源氏の人びとなどが源融の周囲に集まって持った、風流交歓の場から生み出されたものと推定される。

多分は各自の歌の成立譚を持ち寄ることで始まったかと想像される彼らの結びつきの中からは、間もなく貴族文化人らしい生き方、平安貴族の美学とも言うべきものが姿をととのえ始める。それは心を高く保ち、人を傷つけることを避け、自分が置かれた状況の中で最も洗練された言葉を生み出すべく心をはたらかせる、といった生き方である。それは下手をすると外交辞令や虚礼・虚飾といった空々しさへ向かう危険を内蔵してはいたが、当りのよい態度と美しい言葉を楽しむ、ゆとりに満ちたものであった。『万葉集』に代表される奈良時代の「まこと」、すなわち心がまっすぐに言葉となる正直は、むしろ心の持ち方として幼く、ゆとりを欠いて洗練されぬ素朴とされた。それとは逆に、喜びや悲しみも、その場の状況に応じた心の屈折を経た上で、美しく表現するのを良しとする、そういう美学であったと言えよう。

『伊勢物語』はそれをみずから「みやび」と呼んだ。「みや」は宮廷の「宮」であり「都」の「みや」でもある。A「みやび」とは都の宮廷貴族にふさわしい洗練を、理想化して呼ぶ言葉であった。『伊勢物語』を繙くことで、これら平安初期の貴族たちが自分の生き方と意識したものの性質を確認することは易いが、見逃してならないと思われるのは、この「みやび」が形を変えつつも以後にも引きつがれて、日本文化の中に脈々と生きつづけることになる点である。言うまでもないかも知れないが、すぐあとの『古今和歌集』は、業平を先輩歌人「六歌仙」の筆頭に挙げ、『伊勢物語』の歌を数多く採り、歌風としてまさしく業平たちのそれを継承している。

また女流文学を開花させた平安中期の貴族文化、その代表である『源氏物語』について言われる「もののあはれ」も、所詮「みやび」の継承発展に他ならない。そして伊勢源氏を重んずる中世の歌道を軸に、「みやび」の伝統は能や俳諧にまで尾を引いて幕末に伝わるのである。その証拠に、明

治に新風を樹立しようとした^B正岡子規は、『古今和歌集』をこきおろし、『万葉集』の「まこと」に帰れと叫ぶことで、新風確立のエネルギーを得ようとしている。それでいて心と言葉との間の屈折が、昭和の今日なお日本人の精神として息づいていることは、^Cアメリカの社会学者が、日本人の言う「誠実」を、アメリカ人の「シンシア」(sincere)と同義だなどと思つてはいけない、と語っていることから明らかである。シンシアとは、思つた通りに言動する素直を言う。「まこと」である。だが日本人は露骨に怒り露骨に喜ぶことをはしたくないと思う。「みやび」は今も日本人の心に生きている。底までしみこんでいるのである。

源融や在原業平の感受性はこのように、日本人の精神の源流となる栄光に輝くのだが、それは権力に心が向いてしまっている藤原氏の人びと、良房や基経の住む世界とは、ほとんど全く無縁の輝きであった。業平や融の目から見る時、良房や基経の欲望に満ちた行動力は、はしたなさを通りこして厚顔・恥しらずと映つたであろう。政治がこの種の良心に乏しく、押し強い者どもの自由になってゆくのは、嘆かわしかったに違いない。だがそう思つても、^D彼ら文化人に出来ることは知れていた。

『伊勢物語』九十七段に

桜ばな散りかひ曇れ老いらくの 来むといふなる道まがふがに

という歌がのつている。その説明によると、基経の四十歳を祝う宴会が持たれた時に、業平が宴席で詠じた祝賀歌だという。春の晴れた日であつたのだらう。桜花よ、散り乱れて空を曇らせよ、老いがやつて来るといふ道筋がわからなくなつてしまうように、という内容は、華やかなイメージに満ちた絢爛たるものであるが、注意してよみ直すと、どうも祝賀歌にそぐわない所があり、むしろはなはだ危険できわどい歌のように思えて来る。歌全体は賀意に満ちているが、この歌は宴の席上でよみ上げる形で披露されたはずである。五・七・五が、順次に満座の人びとの耳に入つてゆく、そのプロセスを追えばどういふことになるであらうか。

「さくらばな」は問題ないけれども、次の「ちりかひくもれ」は少しおかしい。「散る」も「曇る」も何となく不吉な匂いがしないでもない。そこへ「老いらくの」である。四十歳を境に老年に入る、とされている時代だから、四十を手はじめに十歳ごとの算加を祝うしきたりがあり、賀ではめでたい言葉ばかりを使うのが礼法である中で、「老いらく」はむしろ禁句でなかつたらうか。本人がわが身を「老いらく」と詠ずることはあつても、他者に「老いらく」と言うことは、ずっと後になるまで例を見ない。だから居あわせた人びとはウカたずをのんだであらう。いったい業平は権力者基経(こ

の時は右大臣) に向かって何を言おうとするのか——。だが下の句「来むといふなる道まがふがに」で、歌は賀意に満ちてしまった。宴会は混乱なく続けられたが、スリルは尾を引いた、というようなことではなかったか。だとすればこれは、文化人業平が実力政治家に放ち得る、危険を承知の一矢であった。

まるで綱渡りのような危険をおかして放たれたこのような矢は、小気味のよい響きをあげているが、基経は矢が当たっても傷つきはしなかったのだからどうか。痛烈な皮肉は感受性の強い人を殺しもするが、基経はそういうエセンシテイヴィティーの人でない。良房も基経も、融や業平の周辺から「みやび」の美学が形成されてゆく時期を、同時代人として生きた人びとである。だが美しい言葉に動かされ、鋭い言葉に傷つくような繊細さは、彼ら政治家には無用であり有害でさえあった。政治家ばかりが歴史を作るのではなく、文化人たちの歴史に占める関わりは極めて重い。けれども『大鏡』は文化人たちの精神の持ち方にほとんど言葉をかかず、政治家について語る態度に終始する。これは道長の偉大さに話を持ち込もうとする態度の当然の結果とはいえ、『大鏡』の限界を示すものと言うしかないであろう。『大鏡』は、E傷つきやすい心の持ち主よりも、気にもとめない心の持ち主の側に立っているのである。

(渡辺 実『大鏡の人びと』による。ただし一部本文を改変した。)

問1 傍線部ア～エの本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は 12 ～ 15 。

ア 卓越した

12

- 
- ① 歴史に残るような
 - ② 第一級の知識を持った
 - ③ 他に抜きん出てすぐれた
 - ④ 特別な才能を持った
 - ⑤ 他に負けることのない

イ 虫のかごと

13

- 
- ① 小さなつまずき
 - ② 取るに足らない不満
 - ③ 握りつぶすことのできる意見
 - ④ ひそかに聞こえる悪口
 - ⑤ 取り上げる価値のない考え

ウ かたずをのんだ

14

- 
- ① 内心では喝采をおくった
 - ② なりゆきを興味深く見守った
 - ③ 止めようかどうか迷った
 - ④ どうなることかと緊張した
 - ⑤ わけが分からず混乱した

エ センシティブイティーの人

15

- 
- ① 繊細で傷つきやすい感情を持つ人
 - ② 痛烈な皮肉を平然と受け止める人
 - ③ 危険をおかしても自分の意見を述べる人
 - ④ 美しい言葉に動かされやすい人
 - ⑤ 鋭い言葉をあえて選んで使う人

問2 傍線部A「みやび」とは都の宮廷貴族にふさわしい洗練を、理想化して呼ぶ言葉であった」とあるが、「都の宮廷貴族にふさわしい洗練」とは何か。その説明として**適当ではない**ものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 16。

- ① 形を変えつつも以後に引きつがれて、日本文化に脈々と生き続けることになる思想。
- ② 喜びや悲しみも、その場の状況に応じた心の屈折を経た上で、美しく表現するのをよしとする態度。
- ③ 奈良時代の「まこと」、すなわち心がまっすぐに言葉となる正直を引き継いだ感性。
- ④ 心を高く保ち、人を傷つけることを避け、自分が置かれた状況の中で最も洗練された言葉を生み出そうとする姿勢。
- ⑤ 外交辞令や虚礼・虚飾といった空々しさへ向かう危険を内蔵した、当たりのよい態度と美しい言葉。

問3 傍線部B「正岡子規」の著作ではないものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 17。

- ① 歌よみに与ふる書
- ② 瀬祭書屋俳話
- ③ 病牀六尺
- ④ 短歌に於ける写生の説
- ⑤ 仰臥漫録

問4

傍線部C「アメリカの社会学者が、日本人の言う「誠実」を、アメリカ人の「シンシア」(sincere)と同義だなどと思っ
てはいけな、と語っ
ている」とあるがなぜか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は

18

- ① アメリカ人の「シンシア」の意味は、『万葉集』に代表される奈良時代の「まこと」すなわち「心がまっすぐに言葉となる正直」に近い。正岡子規はその「まこと」に帰れと主張したが、「みやび」のしみついた日本人には全く受け入れられなかったから。
- ② 日本人の言う「誠実」は、「みやび」の概念を引きつぎ、その場の状況に応じた心の屈折を経た上での「まこと」であり、思った通りに言動する素直さを意味する「シンシア」とは異なるから。
- ③ 日本人の言う「誠実」は、『万葉集』以来の思った通りに言動する素直を言う。しかしアメリカ人の「シンシア」は、今も日本人の心に生きている「みやび」の感覚に近いものであるから。
- ④ 「シンシア」は「誠実」と訳されるが、心と言葉との間の屈折がいまなお精神に息づいている日本人は、『万葉集』に代表される奈良時代の「まこと」すなわち「心がまっすぐに言葉となる正直」の意味で使うことにためらいがあるから。
- ⑤ アメリカ人の「シンシア」の意味は、『万葉集』に代表される奈良時代の「まこと」すなわち「心がまっすぐに言葉となる正直」に近い。しかし、日本人は露骨に喜怒哀楽や思ったことを顕わにしないことをよしとするため、「誠実」もまた心の屈折を経た上での言葉であるといえるから。

問5 傍線部D「彼ら文化人に出来ることは知れていた」とあるが、彼ら文化人ができたことは何か。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は19。

- ① 和歌という彼らが中心となつて営むことができる世界の中で、例えば祝賀の宴席で痛烈な皮肉をこめた和歌を詠むこと。
- ② 和歌という彼らが中心となつて営むことができる世界の中で、政治家に対しては常に不吉な匂いにする言葉を込めた和歌を詠むこと。
- ③ まるで綱渡りのような危険をおかして放たれた矢のような痛烈な皮肉を、和歌の中に込めることで政治家たちを呪おうとすること。
- ④ 思った通りに言動する素直さを言う「まこと」の心をこめて、政治家たちの祝賀の会で和歌を詠もうとすること。
- ⑤ 「散る」「曇る」「老いらく」といった禁句を読み込んだ和歌を詠むことで、感受性の強い政治家たちに一矢を報おうとすること。

問6 傍線部E「傷つきやすい心の持ち主よりも、気にもとめない心の持ち主の側に立っている」とあるが、i「傷つきやすい心の持ち主」とii「気にもとめない心の持ち主」の組み合わせとして正しいものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は20。

- ① i 在原業平 ii 源融
- ② i 藤原の高子 ii 藤原基経
- ③ i 在原業平 ii 藤原基経
- ④ i 阿保親王 ii 藤原良房
- ⑤ i 源融 ii 在原業平

第3問 次の各問い（問1～問3）に答えなさい。

問1 次のア～オの語句の意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は

21
～
25

ア 氣息奄奄えん

21

- ① 全力で走って、息切れしそうなありさま
- ② 息も絶え絶えで、今にも死にそうなありさま
- ③ 深呼吸をして、気分を一新したありさま
- ④ 喘息ぜんの発作で、息も絶え絶えなありさま
- ⑤ 全てがうまく進行し、意気揚々としたありさま

イ 権謀術数

22

- ① 権力を手に入れるためにたくらみをめぐらすこと
- ② 人をあざむくたくらみが多数あること
- ③ 人をあざむくたくらみを見破ること
- ④ 人をあざむくたくらみをめぐらすこと
- ⑤ いつわりの権力を見せつけて人をあざむくこと

ウ 融通無碍げ

23

- ① 常に要望に応じて何ごとも断らないさま
- ② 融資がすべて滞りなく行われるさま
- ③ 何ものにもとらわれずのびのびしているさま
- ④ 気が利かなくて物事を台なしにしてしまうさま
- ⑤ 生真面目でまったく気が利かないさま

エ 面従腹背

24

- ① どのようなことがあっても絶対に逆らわないこと
- ② 前後左右をよく見渡すこと
- ③ 表情と言動がまったく一致していないこと
- ④ 内心では反対でも賛成をしてしまうこと
- ⑤ 表面は服従するように見せかけて内心では反対すること

オ 不易流行

25

- ① 流行にとらわれることなくいつまでも変わらないこと
- ② いつまでも変わらないものの中に新しい変化を取り入れること
- ③ 時代を通じて変わらないことこそ素晴らしいということ
- ④ 簡単に変わらないものは多くの人が受け入れるということ
- ⑤ いつの時代でも流行するものは変わりがないということ

問2 次のア・イの語句の使い方として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は 26・27。

ア 舌先三寸

26

- ① 彼の滑舌が悪いのは舌先三寸だからだ。
- ② 舌先三寸の巧みな話術にだまされてしまった。
- ③ 舌先三寸の理論では全員を納得させることはできない。
- ④ 自分に舌先三寸の力があれば成功するのだが。
- ⑤ 舌先三寸の差で彼の提案が取り上げられた。

イ にべもない

27

- ① 彼はにべもない要求をするために、人と会った。
- ② にべもない依頼をしたので、冷たくあしらわれた。
- ③ 彼はにべもない性格をしているので、対応が冷たい。
- ④ 彼を訪ねていったら、にべもない対応で冷たくあしらわれた。
- ⑤ 事前に連絡もなく訪ねたので、にべもない歓待を受けた。

問3

次のア～ウの語句の対義語として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は

28

30

ア 難解

28

イ 不明

29

ウ 曖昧

30

- ① 明瞭
- ② 明朗
- ③ 明白
- ④ 明暗
- ⑤ 明解
- ⑥ 明示